

対談 土門 秀樹 米と花づくり農家

町田

睿

取締役会議長

未来眼やまがた 第16回

プロ農家の育成こそ農業再生への道

農業はその国を支える「礎」である。食糧を供給し、産業や社会に多様な影響を持っている。日本においては様々な変革の中で一時、農業が軽視されることもあった。しかし近年は、食糧の自給率の重要性をはじめ、食の安心・安全、あるいは環境の維持・保全・景観、さらに生活文化や人々の精神性にまで関わる力として、見直されている。農水省のキャリア官僚から、遊佐町で就農して24年という農家・土門秀樹氏に聞いた。

■ ゼロからの農業のスタート

町田 土門さんは何がきっかけで、農業の道を選ばれたのですか。

土門 子供の頃から動物や植物が好きで、特に庭の植物に水をやり、毎日少しずつ成長するのを見るのが大好きでした。今も作物に水をやりながら、その成長をみると、とてもワクワクします。そして、大学は農学部に進学し、人の命に関わる

最も重要な仕事をしたいという思いから、農水省に入省しました。その後、農村青年指導者錬成会で遊佐町の農家の一人娘である妻と出会いました。いわゆる「ひとめぼれ」です。その後、農水省を辞職して遊佐町で就農しました。

町田 不慣れな土地で初めての就農など、当時はご苦労も多かったのではないのでしょうか。

土門 農学部卒業とはいえ、鍬であぜをつくるのも、トラクターを運転するのも、すべて初めてでした。はじめから義父に「すべておまえに任せる」と言われたので、農業技術の月刊誌を引っ引きで稲作に取り組み、なんとか収穫できました。

その後は、作業日誌を毎日付けて、天候・風向き・温度を細かく記録し、稲作については、肥料の与え方、苗の植え方、水の深さなどについて研究を重ね、適正な収穫が確保できるようなマニュアルを作成しました。

また畑作も始め、初心者向きとして良いと勧められた、オクラを10アールの畑で栽培しました。収穫時には人手が足りず、一家総出で作業をしました。収穫が終わり「さぞ、儲かっただろう」と思っていたのですが、いざ収支をみると、箱代、運送代、手数料が差し引かれて、結局手元には7万円しか残らなかったのはがく然としました。

■ 農業は「五感」が必要

土門 農業は、ローテクだと思われていますが、実は逆で、天候や環境などさまざまな状況に左右されるため、臨機応変に対応しなくてはなりません。その日その日の仕事を、無駄なく効率的に組み立てていくことの繰り返しです。

ベストな結果が得られるために、緻密に作業工程を組み合わせてそれを実行する、実にクリエイティブな仕事なのです。また、知力・体力・社交性のすべての能力が必要とされるのが農業です。

町田 日本の製造業が強いといわれるのは、農業の影響が大きいのではないのでしょうか。日本人は現場で智慧を出し合いながら、日々改善する方法を得意としています。例えば、トヨタの生産方式「カイゼン」は、その典型と言えます。こうしたやり方は、農業の生産



●町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年株式会社荘内銀行取締役副頭取就任、1995年より取締役頭取、2008年6月より取締役会議長。

手法から発想されているのではないのでしょうか。また、土門さんのお話をうかがっていても、農業は非常に繊細で創造的な仕事であると感じます。

土門 その通りです。農産物を作る過程で、人間の五感、つまり味覚・視覚・嗅覚・触覚・聴覚のすべてを駆使しなければ、良い物は出来ません。

米づくりにおいては、生産物の味はもちろんのこと、生育中の水稻の葉の色や、触った感触、そして香りも重要な判断材料となります。たとえば、育苗ハウスの中で育った種もみが芽吹いた時の独特の香りは健全に出芽してくれたことを知らせてくれます。

■ 国民の命を支える産業が「農業」

土門 私が日々実感している農業の魅力は、何と云っても、自分で丹精こめて育てたお米をお客様に届けることで「その家族の命を支えているんだ」という何ものにも代え難い「やり甲斐」です。

町田 農業は「総合科学産業」とも言われますが、そのことを知っている方は、まだまだ少ないように思います。その理由に、農業が創造的な仕事であることや、その喜びが実際に仕事に取り組んでいる農家の方から発信される機会が少ないことにあるのではないのでしょうか。

土門 そうかもしれません。多くの農家は、このようなことを100も承知で毎日作業に取り組んでいます。

しかし農家の意見が届きにくい、現状が知られていないことが、農家を取り巻く問題が深刻になっている要因の1つとも思えます。

農業は国民の食、つまり生活と命を支える産業であり、その作業には非常に時間と手間がかかります。しかし、農業は時給が極めて安く、所得も安定せず、農業経営は非常に厳しいのが現実で、私もそのことを日々実感しています。

町田 土門さんの試算によれば、農家の時給は500円程度だそうですね。非常に安くて驚きました。それだけ安いと担い手が減少する一方ではないのでしょうか。

土門 そうだと思います。先ほどお話した初めて栽培したオクラの例を挙げると、家族総出で収穫作業をしても、結局時給200円にしかならないという結果でした。しかし、わが家だけでなく多くの農家が、これまでずっとそのような現況に甘んじてきているのです。

さらに、最近は時給500円で平気な農家が増えていきます。私は「生き甲斐パワー」と呼んでいるのですが、彼らの多くは退職して年金で生活しながら農業を始めた方です。趣味や生き甲斐として農業に取り組むことも1つの方法だと思いますが、採算を度外視して農業に取り組んでいる人が少なくありません。



●土門 秀樹（どもん・ひでき）

1957年東京都生まれ。1980年東京大学農学部卒業（育種学専攻）。同年農林水産省入省。1983年農村青年指導者錬成会で妻と知り合う。1985年農林水産省辞職、結婚と同時に遊佐町で就農。現在は米、ユリなどを生産・販売。山形県総合開発審議会委員等を歴任。

■ 土門流・経営哲学

土門 しかし、私のような専業農家で一家の大黒柱を担っている者としては、とてもじゃないが時給500円ではやっていけません。ちなみに、年収400万円稼ぐには、休日返上で毎日22時間働かなくてはなりません。

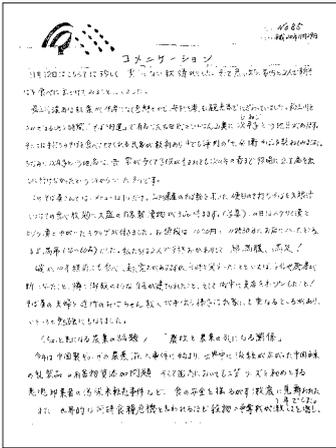
そこで私が行きついたのは、生き甲斐パワーに巻き込まれない農業経営です。プロ農家に徹することです。そのためには効率的な作業管理と品質の高い農産物をそれに見合った価格で売ることが必要です。常に時給を意識した経営管理をしなくてはなりません。

その1つとして、20年ほど前から、稲作の農閑期を利用して花の栽培を始めました。栽培する花の品目を選ぶにあたり、当時は球根の価格が高くて誰も取り組もうとしなかったユリの栽培に取り組んだところ、女性客や贈答用などのマーケットに広がり、軌道に乗りました。

また、自分で作った米の直販に取り組み始めました。当時は米の市場開放もあり、単なる市場出荷では安い外国米に負けてしまうのではないかと、不安がありました。

そこで、お客様に納得してもらえる味と品質のお米を作り、全国のお客様に直接届けています。それに、手作りの通信文「コミュニケーション」と写真を添えて、米作りのこと、最近の農業に関する話題や時には家族のことを報告するなど、わが家の米を食べてくださるお客様に、美味しい米だけでなく安心と安全を届けてきました。

町田 まさにプロフェッショナルの仕事の取り組み方ですね。



土門 しかし、自分で販売するようになると、農作業のほかには営業活動、発送作業などの仕事が増加されます。そのため、わが家の労働時間の半分は、販売するための営業活動になっているのが現状で、半分商人、半分農家という具合です。

本来ならば、自ら研究開発し、新しい品種や栽培技術の改良などの分野に取り組みたいと考えていましたが、実際には非常に忙しくて、研究開発に注ぐ時間はほとんどありません。農家は良い農作物を作るために、とことん追求する職人であるべきだと思いますが、それが出来ない状況に危機感を持っています。私のような専業農家の多くがこの先「商人」になってしまうのではないかと不安もあります。

■「農師制度」でプロの農家を育成

土門 そのため、医師や教師と同じように、国民の食を支える農家のうち、一定の条件をクリアしたプロの農家を「農師」として認定していくことが必要と思っています。国が「農師」の認定を受けた人がある程度保障していくこと、そのためには補助金も必要になるでしょう。

町田 米は農業の中でも、大量生産に向いている作物ではないのでしょうか。しかし、現状の稲作は一戸単位で行う作業になっており、耕地面積など限界があります。

その点をクリアするための1つの方法として、例えば農家を組織化、または企業経営化することで、効率的な運営ができるのではないかと考えています。

土門 農業法人化の動きも広がっていますが、メリットとデメリットがあります。畜産や施設園芸では利益配分がうまくいっているケースもありますが、米や大豆などの土地利用型の組織化は課題も少なくないようです。

町田 P.F.ドラッカーが「共通の目標・価値観を持つ人たちが、適切な組織をつくり、訓練と研鑽によって、共同で成果を上げられるようにすること」とマネジメントの役割について言っているように、農業も1つの目標を達成するために、組織を作りマネジメントしていくことが出来るのではないのでしょうか。

例えば農業でも生産のプロだけでなく、研究開発の

プロ、マーケティングのプロなどが1つの事業体として、顧客のニーズにあった農産物を生産し提供していく方法もあると思います。

土門 適正規模で営む家族経営は、法人経営に負けない強みがあると考えています。たとえば、天候に左右されやすい農業は「いざ」という時の労力確保が重要で、家族ならばそれがやりやすいといえます。すなわち、「いざ的労働」の確保です。

■農政がNo政ではだめ

町田 農林水産省や経済産業省が農商工連携を推進し、農業の「6次産業化」へ注目が集まっています。これまでバラバラだった農商工それぞれの分野のプロが、共通した目標に向かっての取り組みが始動しています。

土門 最近、国・県などの行政機関が農業に大きな関心を寄せています。しかし大事なことは、現場を見て、現場の意見をもっと吸い上げて取り組んでほしいということです。

町田 さらに、大企業が農業分野に参入するなど新しい動きも見られますが、どのように御覧になってますか。

土門 企業の参入には向いている分野と、そうではない分野があるように思います。農業は、その時の政策によって大きく左右されてきました。

例えば減反政策として、大豆への転作が推奨され、補助金が出されました。その補助金を大豆用の収穫機械の購入資金として活用し、町では大規模に大豆への転作がおこなわれました。ちょうど軌道に乗ってきたところで、今度は飼料米への補助金制度が出来て、多くの畑作が稲作へと転換されています。それによって町に水田が戻ってきたのは良いことですが、その様子を見ても、農業はまだ補助金に左右されやすいことがうかがえます。

町田 国の農政に一貫性がないために、農家も地方もそれに振り回されてきてしまったといえるでしょう。日本の国力を支える農業の指針がはっきりしていないことに問題があるのではないのでしょうか。

土門 昨年、三笠フーズによる汚染米転売事件が起りましたが、このような事件は食管理制度の時代にはあまり聞いたことがありません。業者だけが一方的に悪いとも言えません。時には生産者も不正を犯すことがあります。ただ、こうした問題に対して、規制や検査を強化するばかりでは解決しません。関係者のモラル向上が第一です。

そのためには、価格水準の保障は欠かせません。米の価格を維持し、農家の所得を保障して、農家が質の高い米を作っていく環境を整えることこそ、今農政に

必要な政策だと思います。

■ 今こそ農業の方針を打ち出すチャンス

町田 いまの日本の農業は、農協を中心とした体制とそれ以外の体制に二分化していることに問題があります。しかし、この体制も崩れつつあります。

日本には「農業をこれからどうするのか」という、大きな方針と戦略がありません。その政策立案を本来担うのは政治家です。現在のように時代が大きく変わるときにこそ、政治が「農業をこのようにすべき」という方針を打ち出さなくてははいけません。

土門 食の安全を揺るがすさまざまな事件が起こっていますが、このような時にこそ、政府が骨太の政策を出す必要があります。しかし首相も大臣もコロコロ変わるというありさまです。

農政は成果が上がるまで非常に時間がかかります、郊外に新しく工場を建てて、短期間でどうにかなるものではありません。農業はその土地、そして住民から離れられない産業です。だからこそ、じっくり腰を据えて明確な方針と長期的な取り組みが必要です。

町田 戦後日本は、物質的な豊かさを追い求めてきました。経済も社会も成熟し、特に食生活は、世界で最も豊かな国の一つになりました。

本来、日本が培ってきた食文化は、五感で味わうという点で非常に優れ、その土地で生産した季節の食材を調理する、地産地消の素晴らしい伝統があります。特に庄内は、その恵まれた自然から美味しい農作物を生み出す土地と水、それを料理して味わう文化と歴史があります。

土門 農家は五感で農作物を作っていますから、食べる方にも五感で食べてほしいと願っています。しかし、現状は難しいようです。食生活はファーストフード化、個食化し、多くの家庭では家族揃って食事する機会もめっきり減っているようです。

我が家の米を届けているお客様の米の消費量をみると、4人家族の家庭の多くが、月5キロなので、2合の米を週4回しか炊いていない、という計算になり非常に驚きました。

町田 今後はそのような状況を、さらに少子高齢社会が変えていくのではないかと考えています、高齢になれば一度にたくさんの量を食えることができなくなり、量よりも、安全で美味しく食べたいという嗜好に変わってきます。

土門 「価格にはこだわらないが、安心と味にこだわる」というお客様を私は歓迎します。

町田 これからは、生産者が消費者の多様なニーズに応えていくことが必要になるでしょう。これまでのよ



土門さんが栽培した美しいユリの花

うに農産物を生産して「終わり」ではなく、生産者は消費者のニーズを吸い上げ、いかにして付加価値の高いものを生み出していくことができるかが求められていると思います。

土門 同時に、生産者が消費者に農業の実態を説明して、ニーズを誘導することも必要ではないでしょうか。自然相手の産業にあまりわがままを言われても困りますから。

■ 目指すのは「自給力」向上

町田 これからはグローバリズムの進展で農業が根本的に見直されてくるように思われます。BRICsなど新興国の経済発展で、世界的な食糧不足が深刻化していきます。そうした状況の下で、食糧価格も国際的に裁定が働き、日本の質を重視した農作物の競争力も高まってくるのではないのでしょうか。

土門 これから大事なのは「自給力」と考えています。贅沢時代の「自給率」は意味がありません。むしろ、いざというときに国民の命を支えることができるような生産基盤を守ることこそが大事です。このような「自給力」の基盤は、土地・水・そして鍛え抜かれた担い手、すなわち、プロ農家なのです。

いま、このプロ農家が絶滅の危機にあります。「国民のいのちと暮らしを守っている」というプライドを持ち、知識と現場の経験、責任感、実行力、リーダーシップに優れたプロ農家の担い手を育成する取り組みが日本に必要です。そのために、ぜひ専業農家（農師）に光を当ててほしいと思っています。

町田 農業に本気で取り組むことが日本再生につながるというえるでしょう。本日は、お忙しいところありがとうございました。